

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2014年8月23日

文責：JUN

「見る」振り返り、「綴る」振り返り

1 ビデオ映像を「見る」振り返りがもたらすもの

自分の授業を「見る」振り返りは、映像でしかできません。映像でということについては、いくつかの難しさやデメリットがあります。自分でビデオカメラを動かして授業することはできませんから、だれかに撮影してもらわなければなりません。据え置きの固定カメラでも撮影できますが、それではすべての子どもの状況がとらえられず、子どもの表情もはっきり撮ることはできません。だれかに撮影してもらったとしても、画面に映し出されるのはカメラを操作した人のアングルになるので、自分が本当に見たい子どもが撮れているとは限りません。

それでも、映像を「見る」ことから多くの学びをすることができます。たとえ万全でないにしても、そこには授業の事実が存在しているからです。しかも、映像は何度でも再生することができるので、その気さえあれば、自分の授業の事実は何度でも出あうことができます。

授業の映像を見ることによって、驚くようなことを気づいたという事例はいくつもあります。

ある学校で、撮影したビデオ映像を再生して検討する研究会が実施されたときのことです。映像を見た同僚教師からさまざまな気づきや考えが出されたのですが、その中に、学びに没入できていない何人かの子どものことが気になるという発言がありました。それに対する授業者の言葉を聞いたとき、わたしは「見る」振り返りの大切さを実感しました。その授業者はこう言ったのです。

「あの子どものそのような様子、見えていませんでした」

なんと正直で誠実な言葉でしょうか。自分の足りないところの指摘をすんなり受け入れるこのさわやかさこそこの教師の持ち味なのです。授業はそう簡単に変わるものではないけれど、きっとこの教師はそういう自分の課題に誠実に向き合うに違いありません。

別の学校で、授業後の協議会でその授業の映像を少しだけ視聴したことがありました。その際、授業者の教師が顔を赤らめ、自らこう言ったのです。

「わたしって、こんなにしゃべっていたんですね。自分がこんなに不必要なことをしゃべっているとは思っていませんでした。ああ、恥ずかしい！」

その場面を再生したのはその教師の「しゃべり過ぎ」を見るためではなかったのです。けれども、その教師は、思いもかけない自分のすがたを目にしたのです。授業をしているとき教師はある意味夢中になります。研究授業ともなればなおさらです。その夢中さが「しゃべり過ぎ」を生み、学ぶ子どもの「こころ」から遠ざかることになるのです。

授業をした教師は、ある程度の経験を積んだ人でしたから、そういう理屈のようなことは分かっていたはずですが。分かっていたから、だれの指摘を受けるまでもなく自ら気づくことができたのです。けれども、まさか、自分がこれほどの状態であるとは思ってもみなかったのです。それは、衝撃的なことだったに違いありません。それにしても、その自分の心持ちを、隠すことなくさらっと口にしたこの教師は素晴らしい人だと感動しました。

自分の授業を「見る」ことは大切です。自分では気づけていなかった、子どもの事実、学びの事実、そして授業者である自分の事実に出会うことができるからです。

映像による「見る振り返り」が、多くの気づきをもたらしてくれるということは、何も授業者だけのことではありません。外部助言者として授業を見せてもらう立場のわたしにも、それは起こります。

何年か前のことです。Mさんが「がぎぐげごのうた」（まどみちお）という詩をテキストにして授業をしました。小学校一年生です。わたしは、その授業を、撮影されたビデオ映像で見ました。そこには、この時間に初めてその詩に出合ったにもかかわらず、みるみるその詩の楽しさに引き込まれていく子どものすがたが映し出されていました。

最初はややたどたどしく音読していました。けれども、ものの数分もしないうちに子どもの読み声にリズムが生まれ、そのうち、だれかが音読をすると、その声に合わせてからだを揺らせたり、前後に頭を揺らせたりするようになりました。

授業の最後は、「好きなように読んでいいよ」という先生の言葉を受けて、何人かで、または自分一人だと、思い思いに自分たちの音読を楽しんだのでした。

わたしは、映像に写し込まれた音読する子どものすがたがあまりに魅力的で、そのすがたに見惚れるように、何度も何度もビデオを再生しました。からだ全体でことばに触れて読む子どもの声と動きは、ことばにならないほどの楽しさを醸し出していました。

そんな子どもの音読の中で、身体表現を交えて読んだ2人組の読みに強く引きつけられました。詩の内容に合わせた動きといい、リズム感といい、2人の息の合わせ方といい、どうしてペアになってたった数分でこんなにできるのだろうかと思わせるものでした。

ビデオ映像を何度目かに再生したときのことでした。

魅了された2人組の音読までに、何人もの子どもに次々と音読をさせていく場面がありました。その中に、音読を聴く子どものからだの動きが顕著になり始めた場面があったので、そこを見ていました。

一人の女の子が教師の指名を受けて、立って音読しました。すると、その横の子どもが頭を前後に揺らせてリズムをとり始めました。見ると、そういうからだの動きをしている子どもは、その子どもだけではありませんでした。何人ものからだがりズムをとっているのです。音読をする子どものすぐ前に座る子どもは、「ばびぶべぼうぼう のびたかみ」というところで、手で髪の毛がぼうぼうになっている様子を表し始めました。まさに教室中が「がぎぐげごのうた」のリズムで揺れているという感じでした。

わたしは、なんておもしろいんだろう、なんて楽しいんだろう、なんてすてきな子どもたちなんだろう、何度見てもいいなあと思いながら、まさに見惚れていました。

ところが、その映像を見続けていて、どうしても知りたいと思い始めたことがありました。それは、そもそもわたしが魅了された2人組の子どもは、からだに動きが出始めたこの授業の中盤でどうしていたのだろうということでした。その教室にいてじかに授業を見ていたわけではありません。ですから、映像の画面の中から目指す子どもを探し出すということは簡単なことではありません。わたしは、2人の服装とか髪型などを頭に入れて画面に映された子ども一人ひとりをながめました。

こうしてわたしは目指す2人の子どものすがたを画面に発見するのですが、そのことによって、思いもかけないことに気づいたのです。

一人の子どもが音読をして教室中がリズムで揺れていた場面で、その2人の子どもは全くからだを揺らせることなく、じっと黒板に書かれた詩を凝視していたのです。大半の子どもがリズムをとる中、ぴくりと動くこともありませんでした。その2人が、「好きにしていよ」ということになった授業の最後に、見る人すべてを驚かせるほどの楽しいパフォーマンスをやったのけた、それは本当に思いもかけない事実でした。そうだったのか、とわたしは思いました。身を硬くして黒板の詩を凝視していたあとき、2人の体内にリズムが生まれ始め、そのリズムに乗ってからだで表現したいという欲求が生まれていたのです。外見ではわからなかったけれど、2人は周りの動きから確実に学んでいたのです。

わたしは、何度も授業を見直す、つまりそれは映像を「見る」ことによる「振り返り」ですが、それを行わなかったら、この事実気づくことはなかったと思いました。そして、こんな素敵な授業を実現したMさんでさえ、わたしの指摘を受けて映像を見て初めて気づいたというのです。弾けるようなパフォーマンスをやったのけた2人が、じっと黒板を凝視していて、そのとき2人の体内にあのからだの動きが生まれかけていたという事実を知って驚いたというのです。もし授業の場でそのことに気づいていたら、2人の表現の素敵さはもちろんのこと、学び合う子どものつながりと真剣さ、そして学び合いの素晴らしさにもっともっと感動していたことでしょう。

授業をしているその場で教師が見ていることは知れています。見ているようで見ていないことがたくさんあるのです。すべての子どもの学びを確かなものにしていくため、授業の場でこういうことに気づくことができたらどんなにいいのでしょうか。もちろん、一人ひとりの子どもの事実を完璧に見ることなど到底できません。わたしがこのとき気づいたことなど外見からはとらえられないことだから余計見ることはできません。けれども、わたしたち教師は、少しでもたくさんの事実をみることができるよう努めなければなりません。それには、わたしが映像を何度も見ることによって気づいたように、教師たちも学ぶ子どもの事実、教師である自分の事実に出合う必要があります。

映像を使えば、自分の授業の事実を「見る」ことができます。それは、自分ひとりで見るだけでもよいのですが、他者とともに見るともっと効果的です。あの人から学びたいと思っている人に一緒に見てもらえたらもっとよいでしょう。そうすれば、自分では気づかない自分自身と出あうことができます。それは教師にとって驚きになるでしょう。そして、驚きが強ければ強いほど、見えてきた事実の重みを感じれば感じるほど、もっと「みえるようになりたい」という願望が生まれてくるでしょう。教師の「見える」感性は、こうした経験の積み重ねによって育まれていくのです。

「見る」振り返りは大切です。子どもに出あい、子どもの学びに出あい、そして自分自身に出あうことができるからです。

2 見るだけでなく、さらに「綴る」という振り返りがもたらすもの

文章を書くという行為は、思考の深まりをもたらします。ある小説家の講演会で「書くことは考えること」という言葉に強く共感を覚えたことがあります。ずいぶん前のことでその小説家のお名前は忘れました。小説家の言葉を借りるまでもなく、書くことと考えることには密接なつながりがあります。そのことに異議を唱える人はまずいないでしょう。

文章に書かなくても、頭の中でいろいろと考えることはできます。しかし、頭の中に浮かび上がるものは瞬間、瞬間、脈絡もなく生まれては消え、消えては生まれる可能性が高いのです。断片的なものがいくつも生まれ、それが無秩序に頭に詰まり飽和状態になることもあります。けれども、ある目的をもって文章に書くということになると、当然、頭の中に生まれている事柄の関係性・順序性の吟味を行わなければなりません。そして、いよいよ文章化ということになれば、どの事実とどの事実を取り上げ、それをどのように組み立てて記述するか、考えなければなりません。その行為を行うとき、頭の中で無秩序に詰まっていたものが整理されたり、関係性や優先性が明らかになったり、何が重要なことなのかが見えてきたり、もっと言えば、全く気づいていなかったことに気づくこともできるわけです。それは、自分の事実は何であったのかを知ることであり、その事実に存在する価値や見直すべきことを自覚することであり、今後の自分のあり方に思いをはせることでもあります。そういう意味で、教師の「振り返り」においても、「綴る」という行為はなくてはならないものだと断言できます。

先日開催した「授業づくり・学校づくりセミナー」において、この「教師の振り返り」をテーマにしたパネルディスカッションを行いました。その際、K小学校のAさんに、「白いぼうし」という物語を読む授業をビデオで公開してもらい、その授業の事実について彼が記述した振り返りを報告してもらいました。

Aさんの文章は、授業の中の3点について振り返り見つめ直したものでした。そのうちの1点を見ていただき、Aさんの「綴る」行為にどのような意味があったのか考えてみようと思います。そのため、Aさんの文章をいくつか分割して述べることにします。

【Aさんが綴った文章】

A

「紳士は、どんな様子で（松井さんに）『これは、レモンのにおいですか。』と聞いていると思う？」と発問した時、りんこが、「紳士は、松井さんが言っている言葉で、うれしそうににこにこしてる」と話した。

その考えに続いて、ゆうやが「ににおいにこにこしてて、松井さんとおんなじ顔みたいな感じやと思う」と語っている。

次に、わたしが、「どこからそう思った？」と聞いたことに対して、りんこは「もぎたてなので。きのう、いなかのおふくろが速達で送ってくれました。においまで、わたしにとどけたかったのでしょう。」という叙述から「松井さんはうれしそうににこにこしているから、その気持ちが伝わって、紳士もにこにこしている」と答えている。

B

後で考えると、この「紳士もにこにこ」について全体での取り上げ方は不十分だが、子どもたちの様子からみて、紳士の様子が浮かんでいるのだと思った。その後、わたしは、「松井さんもうれしい気持ちがあつてにこにこしてて、紳士もうれしそうに話をしているということ？」と全体に問い返しているが、ここでは「紳士もにこにこ」という子どもの発言から、さらに松井さんの様子を考え合うことをねらって、そのような発問をした。それは、「紳士の様子を読んだ後は、松井さんの様子を読む」という授業の流れを事前に考えていたからである。

C

ここで「お客の紳士までにこにこさせることになった松井さんのうれしさとは？」という問いかけを子どもたちに出すことで、紳士の「うれしさ」から松井さんの「うれしさ」に自然に考えを深めていけたのではないだろうか。しかし、この場面で、その問いを投げかけることができなかった。それは、「うれしさ」という気持ちそのものを表す言葉を、問いの中に直接使うことへの躊躇が自分には常にあったからである。

わたしは、いつも「物語文を読むときには、叙述に即して場面の様子や登場人物の言動を読み描くことから、情景や登場人物の心情が浮かんでくる読みをしたい」と考えてきた。ここでは、松井さんの心情にかかわった声が子どもから出たときに、「うれしい」という一言で松井さんの心情をくくってはいけない、安易に教師から出してはいけないという意識が働いたのである。

D

さらに、その少し後で、「今のにおいを想像して、紳士と松井さんてうれしそうに話しているんだよ。それを思い浮かべて、一回読んでみるよ」というわたしの言葉を受けて、あやが音読する。その後、ようたが、「紳士の思ってることやったら浮かんできた。こんなにええにおいする夏みかんを届けてもらって、松井さんはうれしいんやろなど、たぶん、紳士は思っていると思う」と話した。この後、わたしは、「うれしいんやろなって、松井さんの様子やんな。このときの松井さんの様子は？」と、子どもの思考を再び松井さんの状況をつかむことに戻している。

E

しかし、このわたしの子どもたちへの問いは、この授業の中での分岐点になってしまった。「うれしい」という松井さんの思いは、子どもたちの中から既に何度も繰り返して出ている。そこを、そのまま読み進めていけば、読み深めることができたはずだ。しかし、このことが子どもたちの思考を断ち切ってしまうことになった。そのために、「うれしさ」について深く掘り下げるのではなく、「松井さんはうれしかったんだ」ということで終わってしまったように思う。

F

また、振り返ってみると、ようたが語った「紳士の思ってることやったら浮かんできた。こんなにええにおいする夏みかんを届けてもらって、松井さんはうれしいんやろなど、たぶん、紳士は思っていると思う」という発言を受けて、「どんな夏みかんやった？」と夏みかんそのものが持つ意味について考えさせることもできた。そうすることで、「夏みかん」から松井さんの「うれしさ」について考えを深めていくことができただろう。

① 子どもはどのような考えを出していたのかを噛みしめる

Aさんは、授業の振り返りでもっとも大切なことから書き始めています。それは、授業の中で子どもから出された考えはどのようなものだったのかをじっくりかみしめるという行為です。子どもが語った言葉を、そのまま文字として刻み込んでいくとき、教師は、その子どもの言いたかったことは何だったのかと考えます。振り返りは事実を見つめることから、それは「振り返り」の鉄則です。授業という瞬間的な場では気づけなかったことに気づくためです。「記述する」という行為は、それを可能にしてくれます。

Aさんにとって「お客の紳士のにこにこ」というりんこの考えは想定外のものだったと思われます。しかし、その考えをゆうやが即座に受けているのです。しかも、「紳士のにこにこ」は「レモンのようなおいがする夏みかん」に対するものであり、それは「運転手の松井さんのにこにこ」とつながるものだと、りんこの考えを広げているのです。

ここでAさんが「どこからそう思ったの？」と尋ねるのですが、りんこが出してきたのは「松井さんのにこにこ」に関することでした。りんこはお客の紳士がにこにこしていると述べているのですが、ここで取り出してきたのは松井さんのことなのです。そして、彼女は、松井さんのにこにこが紳士に伝わった」と述べたのです。

こうして見てみると、ゆうやの一言がりんこの二度目の発言を引き出していることが見てとれます。もちろんAさんが「どこから」と尋ねたことも有効だったと思われます。

そういう吟味が、綴りながらできていくのです。

② 教師として執った対応を思い起こす

授業には子どもの事実とともに教師の事実も存在します。もちろん、前述したように、子どもの事実を優先させなければなりません。それをしないで、教師の発問がどうだとか、板書がどうだとかを検討するということは、学ぶのは子どもであることを考えると本末転倒です。

Aさんは、子どもの考えがどのようなものであったか噛みしめるように記述した後、その子どもの発言に対して自分がどのような対応をとったのか記述しています（Bの部分）。Aさんは、授業のそのとき、「紳士のにこにこ」を「松井さんの様子」に移していこうとしていた自分の対応をはっきりと思い起こしています。

刻々と移り変わる授業という場で、自分はどうかどう判断していたのか、その自覚は案外曖昧なものです。咄嗟のことなので、瞬間的に浮かんだ対応をしてしまいがちです。「綴る」という行為は、その場の自分に引き戻し、そういう対応をした事実を自分に突きつけることになります。

③ 子どもの学びへの対応のあり方を考え直す

自分の対応の事実を目の前にしたとき、どんな教師でも、「それでよかったのだろうか」と考えることになるでしょう。Aさんもそうでした。それが、ここからもっとストレートに「松井さんのうれしさ」を持ち出したらよかったということになったのでした（Cの部分）。

断っておきますが、わたしは、このAさんの判断がこれでよかったのかどうかを述べようとしているわけではありません。子どもの事実とはどのようなものだったかを噛みしめ、それに対し

て自分はどのような対応をしていたのかを見直し、そういう対応になったのは自分がどう考えどう判断していたのかと思ひ起こし、自分に正直に、そのときの自分に見えたものを綴ったAさんの行為の大切さを述べているのです。こうして書いたものはだれかに読んでもらうことになるでしょう。その人とのコミュニケーションのなかから、もし自分の見方の足りないところが見えてきたら、そこから大きな学びができます。「綴る」という行為は、書くことそのものにも意味がありますが、書いたものが生み出す対話にさらなる意味がありますから、感じたまま綴ることによいのです。自分を見つめない人に成長はありません。

ところで、Aさんは、ストレートに「松井さんのうれしさ」を取り上げることができませんでした。そこで、Aさんは、授業をしている自分の心にどういふ思いがあったからだろうか振り返っています。授業を振り返るといふことは、単に子どもの事実を振り返るだけでなく、そのときの自分の内面をも振り返ることにならなければなりません。そうでなければ、あのときどうしてあの子どもの考えの真意がとらえられなかったのだろうか、どうして子どもの考えのつながりがみえなかったのだろうか、というような自分の内面の事実と正面から向き合うことができないからです。

Aさんは、子どもから出てきた「松井さんのうれしさ」にストレートに向かうことができなかったのは、「気持ちを問う授業にしてはならない」という自分への戒めが原因だったと分析しています。

④ 授業の可能性をさぐる

Aさんは、ここまでの振り返りによって、「松井さんのうれしさ」にはっきりと向き合わなかったことがよくなかったと考えるようになりました（D、Eの部分）。すると、授業におけるそこから先の自分の対応に対して反省いっぱいになってしまいました。その気持ちは痛いほど理解できます。でも、こういう「悔い」が、子どもの学びに対応するとはどういうことなのかという気づきを生むのです。

ここでAさんは一人の子どもの発言に目をつけています（Fの部分）。ようたです。そうすると、授業ではとらなかった一つの対応が浮かんできます。それは、「どんな夏みかんだったか」を考えるということでした。抽象的な「うれしさ」を持ちだすよりも、具体的な夏みかんについて考えるほうがよいのではないかとこのように考えるようになったのです。

このAさんの気づきは、単に夏みかんという物質を想像するということを行っているのではないことは明らかです。Aさんは、「夏みかんが松井さんにとってどういう物だったか」と考えさせてはと考えたのです。

お客の紳士がレモンと間違えるほどのおいさを発していた夏みかん、それは、松井さんのおふくろが田舎から送ってくれたものだった、そのおふくろの思いを松井さんは「においまでとどけたかったのでしょうか」と想像し、「いちばん大きいのを車に乗せてきた」と語った、そういう夏みかんなのです。夏みかんにまつわるそれらの状況をもう一度を読み味わう、それがAさんの言う「どんな夏みかんだったかを考える」ということなのです。そうすれば、何人もの子どもが述べていた「松井さんのうれしさ」を感じ取ることになるのではないかとAさんは考えたのです。それは、「松井さんのうれしさとはどういううれしさか」と考えるよりも、もっ

とまったくリアリティをもって子どもたちの心に届くのではないのでしょうか。

そのようにしようと思えば、もう一度物語の叙述に即して具体的に描くことが大切になるでしょう。複雑な発問をするのではなく、テキストの文章に触れるために、シンプルに何度も音読することになるでしょう。文章に触れば、この場面の状況を読み描くことができるからです。それは、「常にテキストの文章に戻る」「そのため状況を描くように音読する」という文学の読みの原則にそうものです。Aさんは、「綴る」という行為により、あれこれと考えたけれど、最後にその原則に気づけたのです。

よいことを綴らなければと考える必要はないのです。考えたまま綴ればよいのです。文字にしているうちに、迷ったり、分からなくなったりしたら、その迷いや分からなさをありのまま書けばよいのです。文章がくどくなってもそのまま書けばよいのです。その混沌としたものが自分の真実だからです。自分の真実を見つめない限り、本当に納得できるものは見えてきません。その混沌さの向こうに何かが見えることを信じて、その迷いの渦に入っていけばよいのです。

「綴る」振り返りは、ただ映像を「見る」だけよりも、こと細かく、様々に、また掘り下げて考えることを可能にします。しかし、それが行き過ぎると、複雑に考え過ぎることになり、理屈の泥沼にはまり込んでしまい、反省と後悔という鬱屈した心持ちに沈んでしまいかねません。けれども、それを恐れては綴ることはできません。そういう方向違いの森に迷い込み、無駄だと思われるような時間を費やしたとしても、そういう経験を通過しないと見えてこないものがあると思うことです。わたしがそう断言するのは、わたし自身がそうだったからです。

それを思うと、Aさんが最後にとってもシンプルなところにたどり着いているということは素晴らしいことです。事実を見つめる確かな「目」は、泥沼にはまり込むほどの真摯さの向こうに、それを突き抜けるようにして生まれるものです。「綴る」ことはやはり大切です。

「振り返り」で避けなければならないのは、それをする事で自分の授業がいやになったり、まるでやる気をなくしたりすることです。そうではなく、子どもたちはこんな大切なことを言っていたのだ、この子どもはこんなにすてきな表情で学んでいたのだ、この子どもの間違いにはこんな可能性が潜んでいたのだ、スムーズに進んでいなかったようだけどそこにこんな授業の可能性もあったのだ、そうかこういうことが大切だったのかなどと気づくことです。そうすれば、次はこうしてみよう、こんなことに挑戦していこうという次への意欲が湧いてきます。

「振り返り」は、過去の事実を見つめることですが、実は、未来の自分を見つけるための営みなのです。だから、大切なのです。

7月29～30日に大津プリンスホテルで開催しました「第16回授業づくり・学校づくりセミナー」が、大きな学びと満ち足りた思いで終了しました。ありがとうございました。全国各地からご参集いただいた640名もの方々、報告をしてくださった方々、そして講師の先生方に心からお礼申し上げます。来年度のセミナーも、同じホテルで7月28～29日と決めさせていただきました。また一年先を楽しみにしています。